

# 「脱原発」を「ネタ」にする芸能人

濱本 結

## はじめに

3.11 の震災後、ミュージシャンや作家、役者など、多くの著名人が原発について様々な意見を主張してきた。そんな中、芸能活動をしながら脱原発を掲げ多くの集会に積極的に参加している人物がいる。山本太郎だ。昨年12月の衆議院議員選挙では東京8区から出馬し、落選した今でも政界進出を目指して活動を行っている。だが、3.11後にこうした活動を展開していったのは山本だけではない。坂本龍一や孫正義らに支持を受ける「脱原発アイドル」の藤波心や「ダッ！ダッ！脱・原発の歌」を発表し一躍時の人となった制服向上委員会、さらに3.11以前から長い間原爆の詩を朗読する活動をしている女優の吉永小百合もいる。

本論では、震災と原発事故が芸能人に及ぼしたものは一体何なのか、今芸能界に起きている変化とその危険性について、山本太郎、藤波心、制服向上委員会、吉永小百合から自分が考察したことを論じてみたい。

## それぞれの「脱原発」

この節では山本太郎・藤波心・制服向上委員会・吉永小百合それぞれの「脱原発」に対するスタンスを見ていきたい。

### (1) 山本太郎にとっての「脱原発」

原発発言やツイートは CHECK され必ず仕事干される、お前がその事に触れられぬ事は皆判ってくれる。二週間以上前から母は僕に釘をさし続けた。日雇い労働役者稼業明日から干されてどう生きてく？だから黙ってテロ国家日本の片棒担げぬ。親不孝許せ m( )m 日曜高円寺行くのも許してチョ<sup>1)</sup>

2011年4月9日、山本は自身のツイッターでこのように述べた。これが脱原発活動の始まりであった。山本は原発デモや集会に積極的に参加する一方、自身の原発発言がきっかけで予定されていたドラマ出演が中止となり、それをめぐってファンからの事務所への電話が殺到する事態へと発展した。そして2日後、彼は自ら事務所を退社したのである。

事務所辞めました！今日、これ以上迷惑かけるわけいかなから、やめるな、と、社長、スタッフの皆さん何度も引き止めて下さった。最後には僕の我が儘を聞いて貰いました。13年もいたSISは真面目で正義感強く情に厚い事務所。もう関係ないから事務所への電話しないですね。他の役者に迷惑かかる。<sup>2)</sup>

事務所の被害や自分以外の役者が満足に仕事ができなくなることを危惧したのだろう。長年お世話になった事務所を「真面目で正義感強く情に厚い」と評価しフォローした上で「もう関係ない」と突き放しているところは、事務所や他の役者は自分とは違うということを強調しているように感じられる。

芸能界という人目にさらされる場所において個人の社会的な主張を語ることは、自身の生活の危機を招きかねない。事実、女優の鈴木杏は脱原発発言をしたあとにその発言を軽率な行為であったと謝罪している。山本においても「脱原発」と主張しながら役者で生活をするのができなと感じ、事務所を辞めたのだろう。そして彼は政界進出を目指しはじめる。

この「芸能界」から「政界」への転換こそ、その2つの「場所」における「脱原発」というフレーズの評価のされ方の違いであると考えられそうだが、このことについては後程論じることにして、今度は「脱原発アイドル」藤波心にとっての「脱原発」について考えてみることにする。

## (2) 藤波心にとっての「脱原発」

藤波心、高校1年生16歳。職業、脱原発アイドル。彼女の存在を知ったのはこの論文を書こうと資料探しをしていた時のことだ。彼女の年齢からは想像もできない過激な発言とそれに似合わぬ可愛いルックスに驚愕した。藤波は震災から12日後の3月23日、自身のブログで脱原発の意志を表明している<sup>3)</sup>。

微量とはいえ空気中の放射性物質を吸い続け、微量とはいえ、汚染された野菜を食べ続け、微量とはいえ、汚染された水を採り続ければ・・・微量+微量+微量=??しかも、そういう生活が1週間続くのか、1カ月なのか、1年なのか・・・3年なのか・・・計算私あまり得意じゃないけど・・・(￣\_￣i)影響があることくらい、バカな厨房2年の私でも分かるのに！！

原子力 それはまさにパンドラの箱です。檻から解き放たれた 猛獣・・・。いつ襲いかかるか分からない猛獣と同居出来るほど 私は神

経太くない……。あなたはそれでも、便利と引き換えに これからも、パンドラの箱を開きつづけますか？？今、日本は、色んな面で考え直さないといけない時に来てるんじゃないですか？私には、福島原発の煙が、不謹慎かもしれませんが、そんなパンドラの箱を開けてしまった私たちを死滅させる巨大なバルサンか、ゴキジェットに見えます……。

「批難覚悟で……」と題されていることから彼女の覚悟の上での行動であることがうかがえる。この発言は一気に広まり、この日のブログの書き込みは14000件に上った。

冒頭で彼女の職業を脱原発アイドルといったが、もとは子どもモデルだった。10歳にはCOCOROとしてモデルの仕事をごなし、役者として映画デビューも果たしている。今でも原発集会やデモに参加したり、「脱原発アイドル」として雑誌の取材やラジオ出演、書籍出版をしている傍ら、歌手としてCDを出したりダンスを踊ったりモデルの撮影をしたりと、「アイドル」としての活動も行っている。山本太郎のように事務所を辞めることもなく、仕事に大きな被害がでることもなく、彼女は生活している。芸能界において「脱原発」を語りながら仕事をするにはできないと考える前述の山本とは全く逆で、彼女は「脱原発」を掲げることで自らを主張し、本業であるモデルとの両立を図ろうとしているようにみえる。

### (3) 制服向上委員会にとっての「脱原発」

制服向上委員会は1992年に「清く正しく美しく」をモットーに結成されたアイドルグループだ。結成当時より反戦集会、メーデーへの参加、社会貢献など多彩な社会活動を行っており、海外公演や海外でのボランティア活動も行っている。また曲もそれぞれの時代に対するメッセージングになっているのも多く、他のアイドルグループにはない特徴だ。2003年のイラク戦争開戦時には戦争反対をテーマにした「World Peace Now」を発表、2010年の地デジ化に伴い日本のあり方に対するプロテストソング「TVにさようなら」を発表、そして2011年に発表されたのが「ダッ！ダッ！脱・原発の歌」<sup>4)</sup>（作詞 鈴之介）である。ここで歌詞の一部を紹介したい(右はそのCD)。



それはそれは とても許せないお話  
たとえたとえ 国の政策だとしても  
危ないことが起きてしまったのに ウソついて  
「直ちに人体に影響はない」なんてね  
それがそれが 素晴らしい発明だとしても  
それはそれは 習わない言葉だけど  
ベクレル、セシウム メルトダウンにタービン建屋  
モニターリングに 高いマイクロシーベルト  
もう忘れないから 原発推進派 安全だったら アナタが住めばいい  
みんなに迷惑かけちゃって 未熟な大人で恥ずかしいよね  
ダッ ダッ ダッ ダダッ！ 脱・原発を  
ダッ ダッ ダッ ダダッ！ 大きな声で  
世界へ向けて叫ぼう 危険な現実を（以下略）

制服向上委員会会長でシンガーソングライターの橋本美香は、

ただ、『10代の女の子たちが意味も分らず歌わされているのでは』という視線を感じる時はあります。けれども…歌を通じていろいろな社会問題に触れる中で、自分の頭で考える力を養うことができたと思っています。<sup>5)</sup>

と語り、さらに同9代目リーダーの小川杏奈は、

これまで原発問題について、学校でも全く教えられてこなかったですし、このグループに入らなければ、原発が必要なのか不要なのか、ちゃんと自分で考えることはなかったと思います。…同い年の人たちにも、この問題を真剣に考えてほしいです。<sup>6)</sup>

とコメントしている。

彼女たちはその時々々の社会問題に対し反対のメッセージを表明する曲を歌っている。そして数々の社会問題のなかのひとつが「脱原発」なのだ。曲のテーマを時代ごとに変えることで特殊性を見出している制服向上委員会にとって、「脱原発」を含めた様々な社会問題は彼女たちの生き残るための手段だと言える。しかしそれは、社会問題が「ネタ」として消費されていく過程でもある。

#### (4) 吉永小百合にとっての「脱原発」

次に女優、吉永小百合について考察してみたい。吉永小百合と言えば原

発よりも原爆を思い浮かべる人も多いだろう。吉永はテレビドラマ「夢千代日記」で胎内被曝したヒロインを演じたのを機に、1986年から広島・長崎の被曝者の詩を朗読している。特に次代を担う子どもたちに聴かせたくて、各地の小学校・中学校を回っているという。声高なその場限りの発言ではなく、詩を読むことで、戦争と核の悲惨さを静かに告発しているのだ。3.11以降は福島の人和合亮一の作品を朗読のレパートリーに加えた。

天災は仕方ない。でも、原子力の事故は天災ではない。これだけ地震の多い国に、原子力発電所を建ててきたことを、あらためて問わなければならないと思うのです。

今回、事故が起こるまで、恥ずかしいんですけど、ひとたび事故が起こるとこれほど悲惨なことになるということも、原子力のことも知らなすぎたと思っています…そういう自分に何ができるか、といったとき、せめて、声に出して、原子力のことを考え、原子力に頼らない暮らしを探っていきたい、と思ったのです。<sup>7)</sup>

あれだけひどい原爆だったのだから、原子力を平和利用したらどれだけ素晴らしいか、そんな提言に惑わされてはならない、と吉永は言う。吉永は1945年、戦後生まれだ。だからこそ21世紀は戦争のない世紀になってほしいと切実に願い、訴えてきたのである。

吉永小百合が反原発発言をしていると知った時、あの女優が？ととっさに思ったが、吉永の原爆に対する活動を考えればそれほどおかしくないことであった。原爆も原発も核の力によるもので、それらが悲惨な状況を起こしてしまった。吉永にはその事実だけで十分な活動理由になる。吉永は原発に反対しているわけではない。核に反対しているのだ。インタビューの書いた記事の中に「戦争と核の悲惨さ」とあるのはそのためである。原発事故も原爆被害と同様、核がもたらした問題で、だから吉永は原発に反対するのだ。そして自身の関心の範囲で自分ができることを精一杯する、それが吉永小百合の核との関わり方なのである。

## 「脱原発」をめぐる、芸能人と芸能界

### (1) 芸能界における「脱原発」というジャンルの構築

ここで、永井俊哉の論から芸能人とは何かについて定義してみたい。

芸能人とは、その芸能によって、不特定多数の大衆から注目を集め

ることでその存在が可能となる存在者である。一般の堅気の職業に就いている無徴の人たちは、職務遂行上、自分自身を大衆の好奇心の対象にする必要がない。しかし、芸能人、少なくともプロの芸能人は、自分自身を大衆の好奇心の対象にすることが仕事そのものなのである。

8)

今日、様々なジャンルの芸能人がテレビに登場している。例えば、「オネエ」と呼ばれるジャンルの人々だ。「オネエ」の人々は自らが「異形」であることを敢えて世間に晒すことで「売り」にし、芸能界に「オネエ」というジャンルを確立することに成功したのだ。しかしひとたびジャンルが確立すると「オネエ」であることは一つの「ネタ」になってしまう。

ここで「売り」と「ネタ」について整理してみたい。「売り」とは他と差異化するための芸能人たちの芸や属性のことをいう。「オネエ」でいうところの「男性だが同性に好意を持つ。女装をする。」ことだ。「売り」を持つ人々が数多く登場することによって「売り」が当たり前となり消費されていくと、それは「ネタ」になってしまう。「ネタ」とは消費されてゆく「売り」のことである。そしてそうした「ネタ」のひとつに「脱原発」は追加され、消費されてしまおうとしていると私は考える。その例が藤波心であり、制服向上委員会なのである。

藤波心、制服向上委員会が共にネットで叩かれている理由のひとつに「売名行為」がある。ただ名前を売りたいだけ、本当は原発について真剣に考えていないと非難されている。しかし、前述の芸能人の定義を用いると、彼女たちはまさに「脱原発」を「ネタ」にして、大衆の注目を浴びようとしているのだ。「異形」であることこそが芸能人の生きる道だからである。

ただ、彼女らの中でも程度の差はある。制服向上委員会は社会問題に自らの生き残りをかけている。「ダッ！ダッ！脱・原発の歌」を歌うことは彼女らの芸能活動の流れの中で自然なことであり、現在の使命なのだ。それに対し藤波心は、本業であるモデルの仕事もこなしつつ、いわば副業として「脱原発アイドル」の活動も行っている。そして彼女の「批難覚悟で」語った発言の過激さが注目を浴びたことを受け、「脱原発」を自分の芸能活動にとってプラスに転換しようとしている。

## (2) 芸能界と政治界における「脱原発」の評価のされ方の違い

一方、山本太郎は芸能界において「脱原発」を語ることをマイナスに捉えているのだろうと考える。山本は「脱原発」は「ネタ」にしてはいけない

い、もし「ネタ」にしてもマイナスにしかならないという考えを持っていたし、実際に脱原発活動を行ってそのことを痛感したのだろう。そのためタレントという肩書は残したものの事務所を辞め、「脱原発」を堂々と語れる政界（政治界）への進出を目指したのである。

そこにあるのは芸能界と政界における「脱原発」の評価のされ方の違いだ。芸能界にはすでに述べたように、個人の社会的な主張を語ることは自らの生活を苦しめることになるという特徴がある。しかしながら、政界においてはそうした社会的な主張を行うことこそ彼らに求められていることであり、またそれを前面に出すことを高く評価されるのが政治家なのである。このような「場所」の差というものが存在し、それによって人々は何の「場所」で勝負するのかを決めていく。山本太郎において芸能界から政界への転換は「脱原発」で勝負をするという意志の表れなのだ。

対照的に、吉永小百合においては「脱原発」を「売り」にする必要はないし、「脱原発」を仕事にするために芸能界を飛び出す気もない。吉永は今までのように女優業をあくまで仕事の中心とし、その合間に原発の危険性を訴えていくだろう。吉永はすでにそうしたことが可能な「大女優」という確固たるポジションにいるからである。

3.11以降「脱原発」の風潮が一気に広まったため、制服向上委員会や藤波心といった「脱原発」を「ネタ」にする人々に舞台が自然と用意されるようになった。私はこの状況に不安を覚える。このままだと「脱原発」が「ネタ」として定着し、軽視されるべきではない「脱原発」というフレーズが芸能人によってその重要性を失ってしまうのではないだろうか。

## おわりに

今後の芸能界で「脱原発」を「ネタ」にする芸能人の増加により、「脱原発」という新しいジャンルが確立するでしょう。まさに「オネエ」というジャンルの登場のように。「脱原発」芸人と名乗る人々も登場し、バラエティー番組では「オネエ」枠のように「脱原発」枠も用意され、「脱原発」について司会者からいじられるようになるかもしれない。しかし、それはもはや社会的に意味のある「脱原発」の主張ではなく、芸能界の文脈で時には笑いの対象にもされる「ネタ」でしかなくなるのだ。毎日のニュースで見ていた福島第一原発の悲惨な状況やそれにおびえる人々のインタビューさえも、芸能人によって「ネタ」として流されてしまう。

このように「脱原発」が「ネタ」化される世界がやってくる可能性があるが、これは果たして良いのだろうか。原発事故が忘れ去られてしまうよ

り、「ネタ」化されても記憶に残ることのほうが良いという考え方もあるだろう。原発事故の一番の被害者は福島の人々であるから、我々は「ネタ」化を簡単に非難することはできない。このことを理解した上で、我々はこれから「脱原発」というフレーズと付き合っていかなければならない。

## 注

- 1) 山本太郎俳優 脱原発に60兆票！(yamamototaro0) on Twitter. 2011. 4. 9  
<https://twitter.com/yamamototaro0>
- 2) 注1, 2011. 5. 27
- 3) 「批難覚悟で・・・」『藤波心オフィシャルブログ こっぴーのへそっぴー』2011. 3. 23, <http://ameblo.jp/cocoro2008/entry-10839026826.html>
- 4) 制服向上委員会「ダッ！ダッ！脱原発の歌」2011 アイドルジャパンレコード。映像は [http://www.youtube.com/watch?v=ly\\_i8f-j0xU](http://www.youtube.com/watch?v=ly_i8f-j0xU) で視聴可
- 5) 「制服向上委員会が気になるー地球のココロ@nifty」<http://chikyuu-no-cocolo.cocolog-nifty.com/blog/2011/08/post-1384.html>
- 6) 注5に同じ
- 7) 「吉永小百合 本誌だけに語った『俳優』『映画』そして『原発』のこと」『週刊朝日』117巻21号2012. 5. 18 朝日新聞出版 pp. 32-35
- 8) 永井俊哉『芸能人はいかなる存在か』4. さらし者としての芸能人. 2004『システム論アーカイブ 論文編』  
<http://www.systemicsarchive.com/ja/a/entertainer.html>

今回私は「脱原発」の「ネタ」化についてみたのだが、もうひとつ気になることがある。それは論文で紹介した、吉永小百合の「核」についての認識である。原爆も原発も「核」であるから、吉永は原発に反対の意を示した。山本太郎は週刊朝日で「もう一度、事故が起こってみんなの意識が変わるなんて、最悪です。」と語っていたが、吉永にとっては3.11の原発事故は広島、長崎に次いで3回目であり、これでもまだ意識が変わらないのか、と考えているだろう。この点で「原発」が悪いと強く主張する山本太郎とは異なる。その違いを生んだものとは一体なんなのか。このことを論文で語るができなかったことが私の心残りだ。

私は長崎県出身で、小学校から高校までの12年間ずっと戦争体験を聞いてきた。だから吉永が「核」に反対する理由も何となくだがわかるし、原爆、そして核に他の人よりも思い入れがあると思っている。次、またこのような機会があったらぜひ挑戦してみたい。ただし、もうアイドル研究はごめん。

濱本結